

校長通信

Morifun

<卒業に寄せて>

今日は卒業礼拝、明日が予行、そして土曜日を挟んでよいよ卒業式である。私自身、小中高大と4回卒業式を児童または生徒、学生として経験してきた。教員となつてからは、送る立場として都合33回目の式となる。それぞれに思い出があり、巣立っていった数々の生徒の顔が目に浮かんでくる。全てが忘れられないものであり、特にクラス担任として迎える卒業式は格別なものである。本校の3年生の担任団も恐らく同じ想いを抱いていることだろう。

さて、私自身の高校の卒業式は40年以上前にさかのぼるので、だいぶ記憶が薄れている。それでも記憶に残っていることを羅列すると、まず呼名されても座ったまま返事もしないように指導を受けた。当時の卒業生は45人の8クラス、総勢360人ほど。式のスピード化を図ったことかは謎である。まあその中でも目立とう精神の輩は必ずいるもので、1組の男子生徒が一人大声で返事をした。我々は顔を見合わせでは笑いをこらえていた。誰が代表で証書を受け取り、誰が答辞を読んだのかは記憶にない。式の後、生徒会主催の送る会が行われ、私の悪友の一人が「裏答辞」なるものを読んだ。彼はトレットペーパーに答辞を書いてきた。入学時からの様々な行事、勿論甲子園のこと(我々が1年時に甲子園初出場

を果たした)、なぜ3年生の時に行けなかったか、同じクラスにいたピッチャーのノーコンを嘆き、代表的な生徒たちの恋愛話や悪事を暴き、教科担任の口癖から授業の評価まで好き放題に話しまくり、場内は大笑いに包まれたのであった。その後、後輩たちとエールを交わし応援歌を唄い、後輩たちにもみくちやにされながら退場。教室で担任から一人ひとり証書を受け取り解散。卒業アルバムに寄せ書きしたり、制服の第2ボタンを云々したりという習慣もまだない時代(都会にはあったのかもしれないが)、何となく教室を去りがたかったが、友人と二人でどこかに寄ることもなく家路へと向かった。

確かあの当時、式は3月8日辺りに行われており、その時代の入試制度では国公立大学の1期校の入試が3月3日~4日、2期校が3月23~24日頃だったので、私大専願以外の生徒はまだ進学先も決まっておらず、なかなか卒業の余韻に浸っているわけにもいかなかったのが実情であろう。ましてや私の場合、進路先が決まったのは年度を跨いでのことだったので、私大や1期校に落ちてはがっくりきたり、また気を奮い起こして2期校の受験に挑んだりと怒濤の日々を送っていたのである。今ではそれも良い思い出である。

「卒業式」を英訳すると、graduation の他に commencement という単語に出会う。この commencement にはもう一つ「開始、始まり;初め」という意味がある。つまり「何かかが始まるとされる時間」(the time at which something is supposed to begin)なのである。要するに高校という時間にはピリオドが打たれるが、3年生のみんなにはそれぞれまた新しい時間が始まるということである。かのAKB48の歌にも、「友よ 思い出より 輝いてる明日を信じよう そう卒業とは 出口じゃなく入口だろ…」とある。まさに、この詞の通り、今は思い出に浸っているのではなく、新しい明日に向かいその入口に立って前を見つめる時なのである。みんなの前にはこれから色々な試練も待ち受けていることだろう。もちろん、苦しい時、悲しい時には、高校時

代の楽しかった頃を思い出せばよいし、高校時代の友人に悩みを打ち明けるのもよい。でも必ず明日という日はやって来るのだ。そうこれはもっと古い歌で恐縮だが、「明日という字は明るい日と書く」のである。

では Von voyage!



卒業生各賞受賞者

各賞の受賞者の皆さんです。それぞれ文武両道の実践に取り組みました。おめでとうございます！(敬称略)

理事長賞	岩渕 杏
日本私立中学高等 学校連合会会長賞	岡山 岳人
功劳賞	及川 温大 澤口 健 吉田 匠志 中島 康介 植村 弥生
皆勤賞	遠藤 虹颯 佐々木 雄大 夏井 翔 古橋美桜里 山崎 千智 加村 蒼空 村上 真人 菊田 雄一郎 栗谷川瑞希 池 兵馬 木内 優成 小島 乃 原 康一郎 峰 圭哉 三上 詩音 岩崎 千紘 岩渕 杏 佐藤 未空 田頭 郁也 中島 康介 築場 海斗
答辞・記念品贈呈の辞	村山 優菜

<礼拝の言葉より>

旧約聖書 p.1130 イザヤ書 (43章4節)

(2月4日 礼拝 花巻教会牧師の鈴木道也先生)

《わたしの目にあなたは価高く、貴く／わたしはあなたを愛し／あなたの身代わりとして人を与え／国々をあなたの魂の代わりとする》

いまお読みしたイザヤ書43章4節は、私が特に大切にしている聖書の言葉の一つです。ここでの「わたし」とは神さまのことです。神さまの目から見て、「あなた」という存在がかけがえなく大切であることを伝えてくれている言葉です。

別の翻訳では《あなたは私の目に貴く、重んじられる》と訳されていました。私たちが読んでいる新共同訳が「貴い」と訳している部分を「重んじられる」と訳しています。

「わたしの目にあなたは価高い存在、大切に、重んじられている存在」。聖書が語る愛とは、言い換えると、相手の存在を極みまで「重んじる」ことです。

重んじられることの喜びは、私たちの普段の感覚においても実感できることであると思います。私たちは人から重んじられていると感ずることができたとき、とても嬉しく思うものです。一方で、「重んじる」の反対語は、「軽んじる」でしょう。私たちは人から軽んじられると感ずるとき、とても悲しく思います。侮辱されたように感じ、自尊心が傷つけられます。ヘブライ語の「軽んじる」という語には「呪う」という意味もあるそうです。人を軽んじるという行為はそれほどまでに相手に深刻な影響を与えるものであるという認識が示されています。

今日は1曲、賛美歌を紹介したいと思います。ニュージージーランドで作られた賛美歌です。この曲は《神の目には尊いのち このわたしが宝物》という言葉は何度も繰り返します。神さまは私たちのことをどこまでも「重んじて」下さっている方です。神さまの目から見て、私

たち一人ひとりがかけがえのない存在であることを一緒に心に留めたいと思います。

♪『How much am I worth?』♪

(詞・曲:Colin Gibson)

1、 強いとき認められて 弱れば捨てられて／そんなふうにはわたしの価値 決められてしまうの？／神の目には尊いのち このわたしが宝物／わたしたちの尊いのち ただひとつの宝物

2、 地に落ちた鳥のように 小さいわたしでも／天の父がこのいのちを 養い守られる／神の目には尊いのち このわたしが宝物／わたしたちの尊いのち ただひとつの宝物

3、 指輪から落ちた石の 輝きは消えない／さがしまわる家のなかを ついに見つけるまで／神の目には尊いのち このわたしが宝物／わたしたちの尊いのち ただひとつの宝物

4、 泣きじゃくる迷子の声 遠くから聞きつけ／山を越えて助けにくる 足音が近づく／神の目には尊いのち このわたしが宝物／わたしたちの尊いのち ただひとつの宝物

5、 どんなときも わたしの価値守ってくれるのは／わたしのため 神のみ子が捨ててくれたいのち／神の目には尊いのち このわたしが宝物／わたしたちの尊いのち ただひとつの宝物

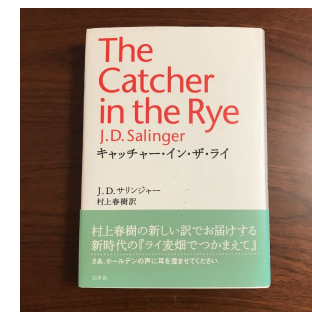
<私の愛読書その1>

今回から私の愛読書について紹介しようと思う。その記念すべき第1回目は、J・D・サリンジャーの「キャッチャー・イン・ザ・ライ」、まさに超ベタ、超有名な本なので、改めて話題に取り上げるのはおこがましいというか気恥ずかしいというか、とにかく「今更」な感じは否めないがお許し頂きたい。

日本では1964年(アメリカでの出版は1951年)野崎孝の翻訳で出版(その時のタイトルは「ライ麦畑で捕まえて」)、そしてそれから約半世紀近く経って2003年に村上春樹が翻訳して話題になった。その間総売上数はアメリカだけで約千五百万部、世界的に見れば六千万部に達し、今でも世界で毎年二十五万部売れている大ベストセラーなのである。村上春樹は高校生の頃に読

んだということだが、確かに「キャッチャー」を読んだのは当時の日本の若者(村上私の8歳年上)にとって通過儀礼のようなものだった(今はどうか知らない)。私は遅ればせながら社会人1年目に読み、素直に面白いと思った。何よりも字句の間から映像が浮かんできそうなのである。実際にはこの小説が映画化されていないし、サリンジャーはホールデン(主人公)に「頼むから僕の前で映画の話をしてほしくないでくれ」と云わせている。野崎訳で3回、原文で1回、そして村上訳で2回、読み直すたびに、頭の中でフィルムが回ってしまうのである。想像力が豊かなのか、はたまた映画の見過ぎなのか、16歳の大人になりきれない、ニキビ面のホールデンが「参ったね(It killed me.)」と呟く。何度読んでも飽きないし、その度にわくわくする自分がある。あらずじは頭に入っているのに、ラストに近づくとき「ああそろそろ終わっちゃう、どうしよう…」と寂しくなるのである。

本の中に割と重要な人物として二人の教師が出てくる。同じ職業の自分にとって改めて彼らの存在が気になってしまう。スペンサー先生は別れる時に大声で「グッド・ラック！」と叫びホールデンの気を滅入らせ、アントリーニ先生は寝ているホールデンの頭を撫でて彼を不安にさせてしまう。二人とも悪気はないのに、でも教師の存在、あるいは大人の行動って見方によってはそうなのかもしれない。読んだ時に色々考えさせられるし、何故かちよつとだけナーバスになる自分がある。というわけで、新しい本との出会いも格別だが、愛読書がある幸せもまた格別なものである。



今月の言葉

「つまりさ、君が何かをあまりにも良くできるようになるとだね、自分でよほどよく注意をしていないかぎり、つついそのうちに、これ見よがしなことをやり始めちゃうわけだ。そうすると君はもうそんなに良くなっちゃまって。」(ホールデン・コールフィールド『キャッチャー・イン・ザ・ライ』より)